

書 評

これまでの「密着型」でもなく、また欧米の「分離型」でもない「親子が距離を保ちつつ交流する『共存型』こそ理想ではないかと提案している。これは核家族化、少子化がすすみ、なお社会福祉制度が未整備の段階にあるわが国の現状を考えると、今後の個人的生活設計に関しても、また各種の社会、教育、福祉施策等の企画、立案に関しても基本に関わるきわめて示唆的な提案となっている。常に時宜を得て貴重な問題提起と示唆的な提案をされている著者である。本著もまさにタイムリーな著作であるといってよいであろう。

なお、全体を通じて、読む側の問題も

■ 書 評 ■

牧野カッコ・中野由美子・柏木恵子 編

『子どもの発達と父親の役割』

九州大学 住田正樹

親子関係の研究は、最近になって漸く父子関係にも焦点を当てるようになってきた。これまでの研究が母子関係に偏りすぎたため父子関係が見過ごされてきたのではないかという反省からである。その背景には父親を取りまく環境の変化がある。共働き世帯の増加、男女の雇用機会の均等化、夫婦別姓、多様な子どもの問題行動の発生、終身雇用制の崩壊と価値観の多様化などである。既に数冊の父親あるいは父子関係の研究の成果が刊行されている。本書は、そうした研究のなかで日本発達心理学会におけるシンポジウムをまとめたものであるが、編者を初

めるが、①「イデオロギーとしての『親孝行』論」と『親子関係』における『心情論としての孝行』論」との区別が必要か、②「Ⅲ. 親孝行の系譜」が全体の文脈からすると、「忠孝」の論理の説明だけではなく、「孝」そのものの中身の検討も必要か、③引用されている「データ」に、ズバリ「親孝行」に関するものもほしい、④「自立」の大切さは即「支え合う心とシステム」を育てる大切さでもあることを強調したい、等についてさらにご教示いただきたい気持ちをもって。

◆四六判 208頁 2,500円

黎明書房

め執筆者にも著名な教育社会学者が含まれている。

本書は4部から構成され、第Ⅰ部「父親研究の現状」と第Ⅱ部「父親と子どものかかわり」が報告論文、第Ⅲ部がシンポジウム、第Ⅳ部が研究論文・著作リストとなっている。第Ⅰ部は6章から成っており、第1章は父親研究の課題を述べているが、続く第2～6章は父親の役割についての報告である。その結論は、夫婦関係のよい父親ほど、また父親意識の強い父親ほど子どもとの関わりが強く、そしてそうした父子関係が子どもの発達を促進させ、また子どもを密着した母子

関係から引き離して自立へと向かわせるのだという。さらに子どもとの関わりが強い父親ほど人間的に成熟したと感じているという。第Ⅱ部は9章から成っているが、父親・母親・子どもを1組とした継続的な調査データに基づいての研究成果である。その時々状況に応じたしなやかな対応を意味する柔軟性 (flexibility) という概念を導入して、父親と子どものかかわりの特徴を捉えようとしている。柔軟性が高いのは、母親よりも父親であり、それも育児参加の多い父親であり、専業主婦の母親よりも有職の母親であり、また父親の育児参加が多いときに母親の柔軟性は高くなる。そして父親の柔軟性は子どもの発達とプラスに結びついているという。

父子関係は、これまで看過されてきた問題だけに、様々な興味ある結論が導き出されているが、本書の特徴は取り分け以下の2点に見られる。第1に、父子関係を社会化の二方向過程として捉えようとしていることである。これまでも親子関係においては親子双方が社会化主体にもなり社会化客体にもなるとして社会化を二方向過程として規定してきたけれども、実際には専ら社会化主体である親と社会化客体である子どもとの関係の研究が多く、逆の立場の研究、すなわち子どもが生まれ夫婦であった男女が親役割を経験することによって如何なる発達的变化を遂げるようになったのかという側面の研究は殆どなかったと言ってよい。これまで盛んに行われた母子関係の研究においても、父親を論じ父親と子どもとの関わり

りを論じてはいるが、本書のように父親役割による父親自身の発達的变化にまで踏み込んではいない。第2に、使用されているデータが、これまで常套的に行われてきたような父・母・子をそれぞれに対象とした一時点的な調査データではなく、父—母—子という1組の家族を単位として継続的に行われてきた調査の結果だということである。しかも子どもの発達的变化を捉えるために複数の観察者による評定法を採用しており、実にユニークかつ貴重なデータだと言える。

本書を読み終えて、改めて子どもの発達における父親の役割とは一体何だろうかという疑問をもった。本書の結論から言えば、父親の柔軟性が子どもの発達に効果をもつのであるから、子どもの発達における父親の役割とは子どもに対する柔軟な態度・行動ということになるのだろうか。ところがこの養育行動の柔軟性と子どもの発達との関連性は父親だけに見られることなのか母親にも見られることなのかは未だ明確ではない(170頁)。確かに母親の柔軟な養育行動は子どもの発達とは関連がないという結論も出ているが(166頁)、しかしその調査対象となった母親は殆どが柔軟性の低い専業主婦である。だが有職の母親は専業主婦よりも養育行動の柔軟性は高いのである(143頁)。有職の母親は、父親と同様に子どもとの適度の距離と職業経験をもっているからである。とすれば有職の母親の柔軟性も子どもの発達に影響をもつことも十分考えられるだろう。実際、柔軟性の概念は父母ともにかかわりなくもち得る特性であり、性によって固定的に分類